

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520537

研究課題名(和文) 役割理論におけるポライトネス

研究課題名(英文) Politeness in Role Theory

研究代表者

尾鼻 靖子 (Obana, Yasuko)

関西学院大学・理工学部・教授

研究者番号：60362141

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：社会心理学における役割理論のひとつであるSymbolic Interactionism (SI)(シンボリック相互作用理論)を適用して、この理論のidentityとroleというコンセプトがどこまでポライトネスを分析ができるかということが本研究の主旨であった。その結果多くのポライトネスの言語現象がこの理論で分析できることが分かった。今まで敬語のレベルの変化、挨拶の決まり文句、などを分析してきた。つまり、多くの言語現象は、話者の取るスタンス(identity)によって、そのパフォーマンスであるroleの具現事象のひとつとしてとらえることができると検証することができた。

研究成果の概要(英文)：In this research, Symbolic Interactionism, a prevalent theory in social psychology, has been applied to politeness phenomena. Identity and role are SI's concepts, which function as a pivot to trigger certain linguistic politeness phenomena. I have investigated greeting formulae and speech level shifts in Japanese by using these concepts. Identities change as the interaction proceeds, and these constantly changing identities are implemented as roles, which are then realised in linguistic terms.

研究分野：語用論

キーワード：ポライトネス 役割理論 identity role

1. **研究開始当初の背景**: ポライトネスという研究テーマは研究代表者が言語学分野で20年間にわたって携わってきたテーマのひとつである。ポライトネスの研究は、学者が理論で考えるだけの時代は終わり、最近、インタラクションにおける実際の場面を分析してポライトなのかそうでないのかを判断する discursive (談話形式) 分析が主流である。この方向によって、ポライトネスは場面とその背景や人間関係によって、ダイナミックに変化し、ポライトであるかどうかの判断も変化に富むことが明らかになってきた。しかし、一方でポライトネス現象を包括する理論づけの方向を無視し、実際の談話の分析だけに終始してしまう傾向が表れ始めた。しかも言語学分野での既存の理論では満足いく分析ができないというジレンマが波及している。そのような状況で、研究代表者も例外ではなく、ポライトネスに適用できる理論がほしいと探求していた。そして当研究を開始する2~3年ほど前から、ポライトネスは言語現象であるとともに社会的、心理的な面を多大に抱えているという点に注目し、社会学や心理学に関する参考文献を読み、試行錯誤を繰り返していた。そのうちに、社会心理学分野で高い評価のある「シンボリック相互作用理論」(Symbolic Interactionism: 以下SIと略す)という役割理論に到達したのである。このことが当該研究の申請のきっかけとなった。

2. **研究の目的**: 本研究は、従来のポライトネス理論とは異なる観点で日本語のポライトネスの現象(敬語及びストラテジー)の分析を試みることを目的とした。社会心理学では自己のアイデンティティを決定するのにRole Theoryを応用することが多いが、この役割理論がポライトネス分析にどこまで適用可能かを試みるのが本研究の主旨であった。従来のポライトネスの研究でも「役割」という用語はよく見かけるが、事例の説明などで部分的に使われているだけで、ポライトネスの原理として扱われることはほとんどなく、相手に働きかける発話の内容によって分類・分析をするのが常である。本研究ではroleをまず原理として掲げ、ポライトネスを分析した。

このroleというのは、単に職業の役割や与

えられた職務という狭い範囲で捉えるのではなく、インタラクションにおいてお互いにどのような立場や位置を取りながら、相手にどのようにアプローチするのかという広い意味での相互作用的な行動を意味する。このような心理的な決定が言語にも顕現され、特にポライトネスはお互いの人間関係、立場を明らかにする要素があるので、roleという用語でポライトネスを分析できるという仮説のもと研究を進めた。

3. **研究の方法**: データは個人が携わり得る社会的活動の中で起こるインタラクションから引き出したポライトネス現象を対象とするので、ごく自然なインタラクションの例が必要とされる。また、広範囲な社会的活動の場、環境におけるインタラクションをデータとして収集したいので、様々な会話、会議におけるインタラクション、インタビューを録音した。また映画やドラマのスク립トを購入し、それもデータとして使用した。録音したものはすべて書き起こしをした。さらに、ネットで公開されている会話コーパス(東京外国語大学のBTS、名古屋大学のコーパス)も利用した。

データ収集を行う一方で、SIに関する文献を閲読した。Symbolic Interactionという学会誌もあるので、理論に関する論文を閲読した。ポライトネスに関しては、論文のテーマが決まるたびに、関連の文献を閲読した。

次に、役割理論からポライトネスに適用できるrolesの種類を分類した。書き起こしたデータから敬語やポライトネスストラテジーと判断されるものを引き抜き、どのrolesにあてはまるのかを判断し、それを一覧表にまとめた。

海外研究協力者は日本語にも堪能で、またポライトネスに関しても多大な貢献をしている学者である。データ分析や理論づけなど多くの面で指示を得、メールを通じて、また学会中においても時間を割いたり、実際にお互いの国を訪れて集中的に議論を重ねたりして、共同研究を行った。当該研究において、会話分析を導入しているが、それはこの協力者のアドバイスを受け、文献の紹介や最近の動向も示唆してもらったの成果である。

研究期間の後半は、rolesの分類やどのポライトネス現象に焦点をあてるかなどが決定

されたので、学会で発表し、論文執筆を行った。

4. 研究成果: (1) SI 理論について多くのことを学んだ。多岐にわたる資料と文献の閲読を通じて、この理論の社会心理学における位置が理解でき、またこの理論の主旨を理解し、これがポライトネスや他の言語現象の背景として適用できることを確信した。

談話において何気なく発している言葉が、実はその発話者がどのように状況と相手を捉え (identity) そして相手に対してどのようにふるまうのか (role) という心理を表しているという点に注目し、それがポライトネス現象にも顕現されているという発見は、新しいポライトネス研究の展開に貢献するものと信ずる。

(2) 言語現象を分析するために、新たに interactional roles という談話における一時的な心理的役割を創設し、また SI においてもそれが roles の分類の一環をなすことを確かめた。そして共同研究を通じて、SI 理論がポライトネス現象に適用できることを確信した。また、論文のテーマが変わるごとに、この interactional roles の分類もいくつかできるようになった。たとえば会議の議長役や、グループで任された仕事などは task-based identity-roles と名付け、会話の最中に母親的な気持ちになったり、距離を感じたり、その場で変化する identity は、improvised role-identity、さらに自分がこのようにすべきと信じている領域を belief-based task role-identity と区別して用語を新しく作った。

(3) データ分析に必要な会話分析について学んだ。この分析法を用いることで、自然会話データを論文の中で例として忠実に書き表すことができ、会話のダイナミックな変化が分析に投影できるようになった。

(4) 新しいポライトネス研究として当研究成果を学会で発表し、また論文を仕上げ専門雑誌に投稿した。下記に記したように、掲載済みあるいは掲載が決定している論文は7件及び出版済みの図書が1件あるが、もう一本投稿して結果待ちの論文もある (Speech Level Shifts in Japanese: A Different Perspective – The Application of Symbolic Interactionism, *Pragmatics* に投稿 (査読論文))。

また、2015年度の7月には、研究代表者

がアントワープで開催される International Pragmatics Conference のパネルの発起人として (査読有) パネル2つ (発表者8人) を統括することになった。パネルの題目は、Re-examination of the Discursive Approach to Politeness - Where are social norms, politeness judgements, universality gone?- このパネルで研究代表者は司会を務めるとともに研究発表もする予定である (7月28日午前に設定されている)

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 7 件)

(1) Yasuko Obana (単著・査読あり) Expressing Thanks in Japanese. *Journal of East Asian Pragmatics* (accepted)

(2) Michael Haugh & Yasuko Obana (共著・査読あり) Joint Utterances, (Dis)affiliation and the Participation Order. *Text & Talk* (in press)

(3) 尾鼻靖子 「感謝表現としての「ありがとう」と「すみません」の境界線：シンボリック相互作用理論を適用して」*関西学院大学言語教育センター「言語と文化」* 18巻, pp15-28. 2015年3月

(4) Yasuko Obana & Michael Haugh (共著・査読あり) Co-authorship of Joint Utterances in Japanese. *Dialogue and Discourse*, 6(1), pp1-25. 2015年1月, DOI: 10.50871/dad.2015.101

(5) Yasuko Obana (単著) Politeness as role-identity - Application of Symbolic Interactionism. *関西学院大学言語教育センター「言語と文化」* Vol. 15, pp1-16. 2012年3月

(6) Yasuko Obana (単著・査読有り) Re-examination of yoroshiku onegai shimasu - The routine formula as the linguistic implementation of one's tachiba-role. *Journal of Pragmatics*, 44, pp1535-1548. 2012年6月, DOI: 10.1016/j.pragma.2012.06.020.

(7) 尾鼻靖子 (単著) 「役割理論における日本語のポライトネス」*社会言語科学会第27回研究大会論文集* pp90-93. 2011年3月

〔学会発表〕(計 8 件)(招待講演及び依頼講演も含む)

(1) Y. Obana, 8th International Politeness Symposium (英国・Huddersfield 大学) 'Request, Refusal and Apology in Japanese Phone Conversation - Patterns of Apologetic Expressions' (査読有) 2014 年 7 月 9 日

(2) Y. Obana, 招待講演 (2014 年 9 月 1 日) 'Routine Formulae in Japanese: Social Conditions and Constraints on their Use' International Japanese Studies Conference, ルーマニア、ブカレスト Christian University にて

(3) Y. Obana, 13th International Pragmatics Conference (インド・ニューデリー) 'Speech Level Shifts in Japanese and the Speaker's Dissociative Roles' (査読有) 2013 年 9 月 13 日

(4) Y. Obana & M. Haugh, Teaching and Learning (im)Politeness (英国・London 大学, SOAS) 'Politeness as the Implementation of Roles - The Application of Symbolic Interactionists' Role Theory' (Michael Haugh と共同発表) (査読有) 2013 年 7 月 9 日

(5) M. Haugh & Y. Obana, 'Teaching and Learning (im)Politeness (英国・London 大学, SOAS) Soliciting, Politeness and Interactional Roles' (Michael Haugh と共同発表) (査読有) 2013 年 7 月 9 日

(6) Y. Obana, International Interdisciplinary Conference (ポルトガル・リスボン、Aberta 大学) 'Japanese Speech Level Shifts and Role Shifts - Application of Symbolic Interactionism' (査読有) 2012 年 9 月 7 日

(7) Y. Obana, (依頼講演: オーストラリア Griffith 大学) 'Roles as the implementation of Japanese politeness - Reexamination of honorifics and strategies' 2012 年 3 月 12 日

(8) Y. Obana, 12th International Pragmatics Conference (英国マンチェスター大学) 'Japanese Politeness in Role Theory-A New Perspective' (査読有) 2011 年 7 月 7 日

〔図書〕(計 1 件)

(1) Michael Haugh & Yasuko Obana (共著: book chapter) Politeness in Japan. In: Daniel Z Kadar and Sara Mills (eds.), "Politeness in East Asia", Cambridge University Press, pp147 - 175. 2012 年 9 月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

尾鼻 靖子 (OBANA, Yasuko)
関西学院大学・理工学部・教授
研究者番号: 60362141

(4) 海外研究協力者

Michael Haugh (マイケル・ホー)
豪州 Griffith University
School of Languages & Linguistics
Associate Professor